

いわきから「ごちゃまぜ」あらゆる障がいのない社会へ

GOCHAMAZE times

2017 WINTER

vol. 7



インタビュー「ごちゃまぜな人」第7回

大場奈央さん

今年からソーシャルデザインワークスの運営にプロボノとして関わって頂いている、大場奈央さん。首都圏を中心に、ユニバーサルデザインの提案、福祉に関する調査研究などを行っています。その大場さんは、ユニバーサルな社会デザイン。自身の経験と理論をもとに紡ぎ出される大場さんの言葉、そして理念。障害とは何かを考え、大きなきっかけを与えてくれます。



その時は、ちょうど乙武さんの『五通り』に関心が集まっていた時期でした。自分にも障害があるので、ユニバーサルデザインやバリアフリーを学んだら、自分のコンプレックスや弱点をメリットにして仕事ができるのかなと思っていました。でも、専門的に学ぶことができる大学は当時はまだなく、とりあえず建築学科に入ったら学べるのではないかと言うことでは建築を学ぶことになりました。

障害のある人は、当然、競争社会では負けてしまいます。だからこそ、自分の障害やオリジナリティを最大限発揮して、自分の能力や興味関心、向き不向きを自分で決断していくしかないと言いません。障害者だから助けてもらつて当たり前という環境では育つことなかったので、学生時代も、自分が生きる道を探り続けてきました。

障害があるからこそ、自分のことを良く知り、自分で選ばないといけない。

多様な生き方を選び取れる社会に

ソーシャルデザインワークスが推進している「ごちゃまぜの世界」のようなものに共感してプロボノとして参加させてもらうことになりました。

今でこそバリアフリーやユニバーサルデザインという言葉を聞いたことがある人が多いと思いますが、私が初めてそれを聞いたのは高校3年生くらいのとき、今からもう20年近く前のことになります。

内閣府で「心のバリアフリー」というのを盛んにやっていて、会議を傍聴したりしているんですが、障害者の生きにくさや困っていることを共有して、結局助けてください」と言わなきゃいけないという構図は変わっています。障害があつて大変だからこうしてください、ああしてくださいって、そういうの、飽きちゃつて(笑)。

生き方の多様性が、社会を多様にしていく

障害者自身も変わらざるを得ない状況になつているとすごく思つていて、特に差別解消法が施行されたので、これからは障害者が自身がニーズや対応方法を自分で発信して解決したり、対応を求めていかなければいけない時代になつてきていると思います。障害者自身が変わらず、社会にばかり変わることを求め続けていつても

みんなと仲良くならないといけないみたいな考え方 자체がそもそも間違てると思います。仲良くしたい人と仲良くすればいいわけだ。気が合わない人は攻撃するんじゃないなくてほんときやいいんじやんつて。そこが無いので、皆が息苦しくなつてしまふのではないでしょか。生き方や働き方が多様になること。それができてしまうやく他の人の選択や個性や考え方の違いが受け入れられる社会になつていくと思います。

結局変わらないですから。

大場奈央 おおば・なお
1980年東京都生まれ。大学では建築学科に所属し、ユニバーサルデザインやバリアフリーを学ぶ。その後、シンクタンクなどでの勤務を経て独立。現在はフリーランスの立場で様々な活動を行っている。2017年よりNPO法人ソーシャルデザインワークスにプロボノとして参画。



菩提院の霜村副住職

藁谷さんのヨガにも参加したことがあるという霜村さん。ヨガも仏教も自分と向き合うことを大事にしているのは同じと言います。「人間って、どうしてもよその人と比べて劣等感を感じたりしてしまう。だから、他者に囚われてしまう心から離れる時間が必要なんです。座禅したり念佛を唱えることも同じですよね。一点に集中することで、自分を俯瞰する瞬間が訪れて、まずは自分と向き合う、自分を知るということが出発点です」

現在も、多様な人たちの話を聞く「未
来会議」など、地域の様々な企画に
関わっていらっしゃいます。そんな
霜村さんにまず伺つたのが、福祉と
仏教の共通点。

さな承認欲求を積み重ねていく先に、他者を受け入れるだけの余裕、余白が生まれます。心と体の両面からまずは自分と向き合い、そこに生まれた余白に他者を受け入れる。他者との関わりのなかで、自分の存在がよりよいものになつていく。講の存在は、I C F がそうであるよ

す。すると、他者へ
の寛容さが出てくる。
他者を批判しないこ
と。それは自分を認
めてもらうための
ルールなんです」(霜
村さん)



菩提院で開催されたごちゃまぜイベント

藁谷さんにも、そして霜村さんにも、共通しているのは、自分と他者の関わりを通じて障害を減じていこうとすること、そして、それがいずれ自分にも跳ね返ってくると信じて、自分から他者を受け入れようとしていることです。霜村さんの言葉を借りれば「利他と自利がめぐる社会」。それはまさに ICF が目指していること、そのもののように思えます。

（霜村さん）
として、修行者が修行を積んで、自分がその結果を得るものと「自利」として、修行者が修行を積んで、自分だけがその結果を得るものと「自利」の如きはと紹介した「利他」の如き語と言います。が、利他と自利は相反するものではなく、自利が満たされるものではなく、自利が満たされたる利他が生まれ、利他によってまた誰かの自利が満たされるという関係にあるんです。自利が足りないことを「自利貧(じりひん)」と言います。
誰かへの寛容は、必ずしも自分に返ってくる。そしてそれこそが修行なんだ
とお釈迦様は言つて いるわけです



ソーシャルデザインワークス佐藤が聞き手をつとめました

イ	表
ン	紙
タ	ア
ビ	ー
ユ	テ
ー	イ
	ス
	ト

藁谷さんが、ヨガの会場としてしばしば使っているのが、いわき市平にある浄土宗のお寺、菩提院。その副住職である霜村真康さんは、かつては社会福祉学を学んだ僧侶でもあり、

は、私たちがいかに障害について無知だったかということです。でも、知つてみたら、なんてことはなくて、結局みんな同じだなって。違いがあるのは当たり前ですし、一緒の時間を過ごすことが大事だと改めて気づかされました」（藁谷さん）



体と頭と心をつなげて考える福祉

霜村 真康
HIMOMURA SHINKOU

佐藤 有佳里
SATO YUKARI

**自分と向き合い、自分を知り、
他者を知る**

障害を、その人のデメリットと捉えることなく、他者や社会が関わることで改善できるものと捉える。ICFが掲げる理念そのままに、障害の有無に関係なく同じ時間を共有し、自分の心や体、他者との関わりを見つめ直そうという動きが、今、少しずつ広がりを見せています。

いわき市内でヨガのインストラクターとして活動している藁谷弘子さん。2年ほど前から、視覚障害のある方たちや、自閉症など心に障害のある子どもたちへ、定期的にヨガのプログラムを提供しています。藁谷さんによれば、海外にはスペシャルニーズ（障害）のある子どもたち専門のインストラクターがおり、その先生が来日したときにトレーニングを受けたことが現在の活動のきっかけだつたそうです。

「少しずつ自分の体と向き合ふと、今までではできなかつた動作ができるようになりました。それは障害の有無に関係ありません。以前はヒザを抱えることができなかつた子が、ある日、自分のヒザを抱えることができて、『生まれ初めて自分のヒザが見えた!』って感動しているのを見たとき、ヨガにしかできないことがあるんじやないかと確信しました」(藁谷さん)



雲寺で行われている藁谷さんのヨガのプログラム

A portrait of a woman with short brown hair, smiling slightly. She is wearing a white zip-up hoodie over an orange shirt. The background shows a room with a light-colored wooden floor and a black border along the wall.

ヨガを通じて障害を知ったという藁谷さん

小林舞香(こばやし・まいか)
1986年11月10日生まれ。東京都出身。
アクリル絵の具を使用し、手描きによる精
密な写実画が特徴。2017年1月にNY、
4月にLA、11月にロンドン、12月にアム
ステルダムで個展を開催。



私は何も知らなかつた。コロンビア人の友人がなぜアメリカに来たのかも、この街で生まれ育ち日本国籍を持ちながらも日本に住んだことがない友人の思いも、私自身がぶちあたる見えない壁が数え切れないほどたくさんあること。南米出身の友人たちがとにかく踊ることが好きなど、アメリカのビザ取得に際し、4年制大学卒業が多いのビザ取得条件に盛り込まれていること、自分が住むエリアの住民の人種が変わってきた理由、地下鉄で若者たちがダンスでお金を稼ぐわけ。どれも、ニューヨークに来たことでもうかを知ったとき、それを知った喜びと同時に、なぜ今まで知らなかつたのだろうと思いつみ上げることがある。

何も知らない

こんには。代表の北山です。先日、モアイ像で有名なイースター島に行つきました。僕はモアイ像は数もそんなに多くなく、ずっと立ってると思っていた。しかし、それは先入観でした。まず、島全体に1000体近くものモアイ像が存在し、それらのほとんどが自然の状態では倒れているものでした。僕がイメージしていたモアイ像は、倒れた状態のものを人工的に立像(かつて、部分的に修復)しているものだったことが分かりました。また、モアイ像は様々でした。埋まっている、帽子をかぶつて、顔だけ、目がある。子どもの背丈くらいのものから3階建てのビルくらいの高さのものまででした。モアイって一声で言つても、ものすごく多様だつたんだ!これらのこととは恥ずかしながら全く知りませんで

そして思うことは、私が見聞きしたこと以外にも、真実はたくさんあるということだ。宇多田ヒカルさんが歌つていた。「誰かの願いが叶うころあの子が泣いてるよ」。時に目を逸らしたくなるような事実もあるけれど、知つたからにはありきたりの勇気と、持ち続ける希望とで、すべてを抱え、日々を向きに暮らすのだ。

ペルー支部北山剛(代表理事)

宮本英実(理事)

そして私は今まで知らなかつた。コロンビア人の友人がなぜアメリカに来たのかも、この街で生まれ育ち日本国籍を持ちながらも日本に住んだことがない友人の思いも、私自身がぶちあたる見えない壁が数え切れないほどたくさんあること。南米出身の友人たちがとにかく踊ることが好きなど、アメリカのビザ取得に際し、4年制大学卒業が多いのビザ取得条件に盛り込まれていること、自分が住むエリアの住民の人種が変わってきた理由、地下鉄で若者たちがダンスでお金を稼ぐわけ。どれも、ニューヨークに来たことでもうかを知ったとき、それを知った喜びと同時に、なぜ今まで知らなかつたのだろうと思いつみ上げることがある。



編集後記

今回の特集は本当にテーマにすべきかどうか迷いました。「障害」を取り扱うことが逆に「障害」を意識してしまうのではないか。スケッチブックに書いた言葉と自分の中に内蔵しているものは同じではないかも知れない。でも言語化された言葉が必ずしもネガティブではなかった。社会はごちゃまぜだと意識することで他者を否定しない。そのままの姿や考え方を尊重しつつ自分のことでも大事にできるような社会になつたら嬉しいです。編集/佐藤有佳里



こんな時にソーシャルスクエアに来る前までの経歴や経験は様々で、得意なこともやりたいことも様々。かなりクオリティの高い趣味をお持ちの方も沢山いて、それを自分で楽しんで持っているのは勿体無いな、といつも思っていました。

そんな時にソーシャルスクエアをもつ地域にひらけた、気軽に立ち寄れる場所にしたいという声もあり、そのための練習としてソーシャルスクエアのメンバーだけで今回のSOCIAL SQUAREフェス&SQUAREカフェを開催。コーヒーが好きなメンバーさんはお勧めの豆と器具を持ってきてコーヒーを入れてくれ。室内はとてもいい香り。コーヒーが苦手な人はメイカルハーブを飲み、當時流れている映画を見ながらまったり。前職でエステの仕事をしていた方はハンドマッサージ店を、ネイルの仕事をしたいと思つていた方はネイル店を開き、手芸の得意な方は羊毛フェルトのワークショップを開催して楽しんでいました。他には自宅で飼っているワンちゃんを連れて来てくれ、気持ち

の落ち込んでいる方も癒されています。ワーケーションや動物や飲み物を通して新たなコミュニケーションが生まれ、好きでしていたこと他の人に感謝される。そんなひとりが一人一人に繋がったよう見えました。

今は2階に展示スペースもあり作品展示も行いました。次回は出店したいという方も多い。今後それぞれの技術や趣味を生かして地域の方に楽しんでいただけようとしています。

(いわき店 佐藤有佳里)



他者との接点の機会に

ソーシャルスクエアに来る前までの経歴や経験は様々で、得意なこともやりたいことも様々。かなりクオリティの高い趣味をお持ちの方も沢山いて、それを自分で楽しんで持っているのは勿体無いな、といつも思っていました。

ソーシャルスクエアに来る前までの経歴や経験は様々で、得意なこともやりたいことも様々。かなりクオリティの高い趣味をお持ちの方も沢山いて、それを自分で楽しんで持っているのは勿体無いな、といつも思っていました。

日々ソーシャルスクエアでは、さまざまな障害のある方が自立や就職を目指して通っています。いわゆる、福祉施設のひとつですが、そこで行われていることは、豊かな暮らしへ繋がるヒントがたくさんあります。このソーシャルスクエアからでは、そんな福祉の現場で行われている活動やそこに通われるメンバーさん、働くクルーの声をお届けしていきます。



SOCIAL SQUAREとは

「就労移行支援」と「自立訓練(生活訓練)」のサービスを提供している福祉事業所です。障害特性への理解がある支援クルーにより、生活習慣の見直しや働くためのスキル習得など様々なニーズに対応できる環境を整えています。就労移行支援では、体調管理、コミュニケーション訓練、職業訓練、生活相談などの支援を受けながら支援クルーと一緒に就職と、その後の職場定着を目指していきます。自立訓練(生活訓練)では、リラックスできるサードプレイスとして、さまざまな活動を通して、心に栄養を与えることや生活リズムを整え、活力ある人生に一歩づつ踏み出しています。



クリスマスカードづくり

10月から西宮店のクルーに加わった柳橋です。これまで、デザインや造形活動に携わり、指導する立場にあります。今やデザインは、ライフワークと言えます。その中で、福祉を視点に社会を見渡したとき、デザインが何か特別なものに位置付けられており、より柔軟に、様々な可能性を開いていく必要がありますと感じていました。「福祉+デザイン」という課題に、いつか巡り合いに向き合うときを思い描いてきたことが、ソーシャルスクエアとの出会いに繋がり、ライフワークに新たなキーワードが増えることとなりました。

今回、西宮店では、これまでの経験から「ものづくり」のワーケーションを企画。12月に向け、クリスマスボップアップカードを作成しました。ボップアップカードを制作しました。切つたり貼つたりしながら、イメージした形を作り上げていく根気のいる作業でした。設計図を描いて作る人、飛び出す仕組みを何度も思考錯誤する人、メッセージを書き込む人など、メンバーたちは、時間も

時間がかかることを理解していました。

今回、西宮店では、これまでの経験から「ものづくり」のワーケーションを企画。12月に向け、クリスマスボップアップカードを作成しました。ボップアップカードを制作しました。切つたり貼つたりしながら、イメージした形を作り上げていく根気のいる作業でした。設計図を描いて作る人、飛び出す仕組みを何度も思考錯誤する人、メッセージを書き込む人など、メンバーたちは、時間も